

第 594 回：論文やレポートの書き方について (7) (DM)

みなさんこんにちは。LA 毎週月曜 12 時～15 時担当、博士課程 2 年の DM です。

今回は、レポートの問題設定を実際に行っていきます。

前回 (第 592 回) お伝えしましたように、問題設定をするためには、その準備として、資料を自分で読んでおく必要があります。レポート課題の場合、読むべき資料は「大学の図書館でまにあう程度」(澤田 1977: 27) でも大丈夫です。

それで、資料をいくつか読んだら、必要なデータを自分なりにまとめていきます。私の場合、1) 谷崎潤一郎について、2) 『文章読本』について、3) 「含蓄」について、必要なデータをおよそ次のようにまとめることができました：

「1」：谷崎は、永井荷風の「情感の豊かなエキゾチックな作風」に影響を受けた小説家で、「明治末期から大正初年にかけて (…) 最も才能豊かな作家と見られ」た (伊藤 1973b: 481)。そして、関東大震災をきっかけに「関西に住んでから古い日本の伝統美についても新たな発見をし」た (中村 1954: 156)。『文章読本』(1934) は「その所謂古典主義時代の仕事の頂点に当たる年に」書かれた (伊藤 1973a: 105)。

「2」：伊藤によれば、『読本』は「ヨーロッパの翻訳文体を基本とする日本の近代小説の文章についての反省と批判を土台とし、積極的に日本文の特色、その欠点とその長所の指摘を行った」(伊藤 1973a: 105)。三島によれば、『読本』における谷崎は「自分の好みに偏せず、古典から現代にいたる各種の文章の異なる魅力を、公平に客観的にみとめ

つつ、且つ自分の好みを円満に主張している」(三島 1975: 454)。一方、勝本によれば、谷崎の随筆は「力説の塊」で、『読本』には「一つ独断をまっしぐらに繰り返し繰り返しこねて見せている趣き」がある (勝本 1972: 37)。

「3」：「含蓄」の主張は「陰翳の世界を文学の領域の呼び戻そうという「陰翳礼讃」の結語と重なる」(千葉 1982: 254)。

資料を整理した結果、『読本』における谷崎の説明が、「客観的」(三島) か、それとも「独断」(勝本) かというので、意見が異なっているのが分かりました。直接の論争ではないにせよ、『読本』における谷崎の説明が既に議論の対象になっていることが、データを並べることで、分かったのです。

ここまで私は、「含蓄」を調査対象にしようとしてきました。ただ、その理由は、「含蓄」を語る谷崎の説明が「直感としては分かる気がするのに、理屈としてはよく分からない」と思ったからでした。三島と勝本の意見を読んだ私は、自分の関心が、「含蓄」そのものよりは、むしろそれを説明する谷崎の立場にあると気づきました。

だとすれば、私の問題設定はこうすべきでしょう：「「含蓄」を説明しようとする『文章読本』の谷崎潤一郎は客観性を意図しているか」。その答えは、上の議論を参照すれば、「客観的」か「独断」のどちらかであるのが予想できます。また、意外にも『読本』は自己語りの多いテキストですから、論証作業としては、その箇所を分析したらよいことが予想できます。問題設定がひと段落つきました。

ということで、今回の LA 通信はここまで

第 594 回：論文やレポートの書き方について（7）（DM）

です。次回から先の手順へと進んでいきます。
みなさんどうぞよろしくお願いいたします。

参考文献（※引用箇所は新字体に改めてある。）

伊藤，整（1973a）「谷崎潤一郎」『伊藤整全集』（第 20 卷）新潮社、8-150 頁

伊藤，整（1973b）「近代日本の文学史」『伊藤整全集』（第 21 卷）新潮社、403-591 頁

勝本，清一郎（1972）「谷崎潤一郎と志賀直哉」日本文学研究資料刊行会[編]『谷崎潤一郎』有精堂出版、31-39 頁

澤田，昭夫（1977）『論文の書き方』（講談社学術文庫）講談社

千葉，俊二「本文および作品鑑賞」『鑑賞日本現代文学』（第 8 卷）角川書店、33-255 頁

中村，光夫（1954）『日本の近代小説』（岩波新書）岩波書店

三島，由紀夫（1975）「谷崎潤一郎について」『三島由紀夫全集』（第 32 卷）新潮社、445-455 頁